

熊谷重勝教授記念号に寄せて

長年にわたり熊谷重勝先生は、経済学部の教育・研究の向上・発展に尽力されました。その熊谷先生の功績を讃えて、ここに記念号を発刊できることは、経済学部にとって大変名誉なことでもあります。

熊谷先生は1991年に本学経済学部教授として赴任されて以来、2013年3月に定年退職されるまで22年間にわたり、本学ならびに経済学部の発展のためにご尽力され、学問の府としての本学の名声を大いに高めてこられました。

熊谷先生は学部では会計学、会計政策論等を主に担当されていました。特に、会計学は学部カリキュラムにおける基幹科目であり、各論科目への導入科目として重要な役割を果たしてこられました。また大学院では、会計学特論、研究指導等を担当され、熱意あふれる指導のもとで多くの研究者を育成されました。先生の指導を受けた大学院生が、各地の大学で活躍する教員として巣立ったことは、本学の研究者養成に対する先生の献身さを雄弁に物語っています。

また熊谷先生は、大学院前期課程主任（2001年4月～2002年3月）、大学院後期課程主任（2001年4月～2003年3月）、会計ファイナンス学科長（2002年4月～2003年3月）として学部運営にも尽力されました。とりわけ全国の大学に先駆けて新設された会計ファイナンス学科の初代学科長を務められ、本学における高度職業人養成の礎を築かれました。

熊谷先生の研究は、大きく二つに分類することができます。第一は、コーポレート・ガバナンス研究です。この研究には『現代証券市場と企業財務』（1982年）、「コーポレート・ガバナンスと株主資本——ROE低下問題のスケッチ——」（1998年）、「会社支配と機関投資家」（2001年）等が挙げられ、巨大会社の自己金融（内部留保）について分析されています。

第二は、著書『引当金会計の史的展開』（1993年）として結実した明治期の導入から現代の引当金論争までを網羅した引当金の制度史研究であります。これは、自己金融の機能を有する引当金の見積り計上が、巨大会社の資本の維持・拡大に資する形で制度化され、実践されていた過程を膨大な史料を駆使して分析した貴重な研究であります。この研究により1993年9月には博士号（経営学・本学乙126号）が授与されました。

このように熊谷先生の研究業績は、経営財務論と財務会計論という二つの分野に跨っており、会計が捉えようとする対象（会計客体）の論理、資本運動の歴史性と矛盾を科学的に解明することを一貫して追求され、着実に研究成果を積み重ねてこられました。

熊谷先生は学会においても大いに活躍されています。日本会計研究学会、会計理論学会、日本経営学会、証券経済学会、ヨーロッパ会計学会等に所属され、さまざまな領域における研究・教育の発展のために寄与されています。とりわけ、会計理論学会では理事として、学問的な貢献ばかりではなく、学会の運営面においても尽力されています。また定年退職後も、国内外を問わず、多くの学会で発表を続けられています。

こうした研究姿勢は、我々後に続く者にとって大きな勇気と激励を頂いた気持ちです。熊谷先生がこれからもますますご活躍されることを祈念して、記念号の発刊辞に代えさせていただきます。

2014年1月

経済学部長 郭 洋 春